



「国際共通語としての英語」教育実践授業：

— 通訳入門からゼミ海外活動まで —

国際学部 生田 祐子



コロンビア大学教育大学院で英語教授法と応用言語学の学びを修了後、93年非常勤講師として赴任、95年から専任教員となり、今年で15年目を迎える。担当科目は、専門ゼミナール、英語コミュニケーション論、通訳入門、ボランティア論、CALL、EIC、来春から始まる新学科では、英語学（社会言語学）、英語科教育法も担当。ニューヨーク滞在中は、通訳と翻訳業、日本語教師も経験。子供の頃からの夢は、外交官と国連の同時通訳者。

（いくた・ゆうこ／写真はプリスティナのマザーテレサ像とともに）

最近、英語教育を考える中で、**English Reality**¹ という言葉に出会いはっとした。私が授業やゼミを行う上で最も重要だと考えていることは、英語を学生自身の言葉として、実際に英語を使って情報を収集・発信することであり、まさに **English Reality** を体験することである。私の授業ではできるだけアウトプット＝英語を使う訓練をすること、即ち **English Reality** を体験することを授業の根幹にしている。本稿では、私の授業を支える教育論、国際語としての英語論、海外におけるゼミ活動を含めて授業を紹介する。¹ 本学情報学部ジュリアン・バンフォード教授が提唱する概念。「英語を使用する現実の生活」という意味。

1. 私の授業の教育理論：

Silent Way + Alternatives

ユニークな英語教育研究者として知られるファンズロー博士（コロンビア大学名誉教授）の一言は忘れ難い。初回の英語教育法の授業での質問は、「採用面接で、あなたが一番すぐれていると思う教授法を問われるとどう答えるか。」その後、私は自信をもって **Silent Way**² と応じようと身構えたのだが、先生のその後の言葉は、「これが一番の教え方だと信じている人、私のやり方が最適です。という人は不採用です。教室の空気は実に流動的、学生に合わせて言語の教え方は常に

Alternatives（他の選択肢）を持つ姿勢が必要です。」**Alternatives** を持つとは、教師として当然のことだが、学生を動機付ける

Alternatives を見つけるためには、学生たちをよく観察すること、他の教員から学ぶ姿勢が不可欠である。このことを前提として、私の授業は学生たちの習熟度、ニーズ、関心を常に意識している。しかし正直に言えば、私の勘違いや一方通行もあるため、今なお私の授業は発展途上にある。ファンズロー博士への問いに用意した **Silent Way** は、実際私が最も基本とする教授理論である。教師が知識を伝達するのではなく、学生に発見させる方法論であり、そのためによりよい **Alternatives** を用意しながら授業を展開することを心がけている。

² 数学者 **Caleb Gatteno** が提唱した「気づきを促す教育アプローチ」

2. 国際語としての英語の視点

2.1 共通語としての英語=ELF³の背景

英語はどの国に属する言葉か？という質問に対して、英国、米国という答はもはや当てはまらない。現在英語でのコミュニケーションが行われる現場は、80%が、いわゆる **Non-native speaker**、英語を母語としない話者の間でのコミュニケーションだと言われる。例えば、お隣の韓国の大学生と日本人大学生が交流する場合、第1に共有する言語ツールは、英語である。世界中の多言語話者を相手にするビジネスや研究の場においては、もはや英語以外に選択の余地がないといっても過言ではないだろう。統計学的には65億の地球人口のうち英語を母語とする話者に加えて **ESL⁴** と **EFL⁵** を含める英語人口は「少なくとも」20億人だと試算できる。今後 **BRICS** 各国の経済成長に伴い、この国々の英語人口は爆発的に増加すると予想されるので、10年後には地球人口の半分以上が英語話者になるかもしれない。現在 EU では、公用語は参加国全部の言語としているが、文書翻訳や通訳に伴う経済効果や効率が悪いため、実際は英語が共通語としてその地位を確立してしまった。さて2015年に統合を目指すという **ASEAN** の動きはどうだろうか。

2.2 共通語化への課題と展望

英語の共通語化については、国家と母語アイデンティティへの影響を危惧してこの英語支配に意義を唱える研究者は少なくない。それはイデオロギー論を交わすには面白い話題ではあるが、社会言語学の研究者からは、**So, what?** と答えが返ってくる。というのは、言語は人間の社会のニーズにより変化をとげ、歴史とともに動き続けている。今後社会が直面する課題は、英語を共通語にするかしないかでなく、その流れに対応できない人たちを作る **English Divide** への対策をどうするかである。次元は異なるが **Digital Divide** と同じく、経済活動に大きく影響を与えることは否めない。

英語教育の現場では、**World Englishes** (世界英語) と呼ぶ、地域で生まれる様々な英語

を正統とする概念も定着している。しかし何を標準英語として教えるべきかと言う疑問に対して、発音面も含め答えはまだでていない。英語のアクセントが少々母語の影響を受けていても、教養ある英語使用者であれば立派にモデルになる英語を話すこともある。**JICA** 理事長の緒方貞子氏がノンネイティブだといっただれも彼女の英語が正統でないとは言わないはずである。来年度から始まる国際学部の英語教職課程では、英語のネイティブ信仰とも言える英語正統派価値観ではなく、日本人として堂々と自分の英語に自信を持って授業を行うことができる英語教師を育てることを目標としたいと考えている。

³ ELF=English as a Lingua Franca (Lingua Franca とはラテン語で自由語の意味)

⁴ ESL=English as a Second Language

⁵ EFL=English as a Foreign Language

3. 授業への応用

3.1 英語必修科目(1年生対象のCALLとEIC)

英語が生活の言葉でない日本社会では、実際に英語を使用する日常=**English Reality** は限られているため、授業だけで英語が使えるようになるのは大変難しい。私が担当する **CALL** と **EIC** のクラスでは、授業の中で個人が英語を使用する時間を常に半分近く確保するようにしている。徹底して言葉でのコミュニケーションに慣れさせることが狙いである。これは情報学部のバンフォード研究室で生み出された方法に基づくが、授業テキストの内容は学生の生活とかけはなれた非日常的な内容ではなく、日頃日本語で話していることや情報交換である。高橋・バンフォード著の *Say What You Like!* (Hot Cocoa 出版) をテキストとして使用している。**CALL** の授業ではシステムを利用してペアやグループを作り、音声でのコミュニケーションのほかライティングによるチャットも行うことができる。このようなデジタル環境でのコミュニケーションは国際社会の **English Reality** として今後需要が高まると予想される。

3.2 プロジェクト型授業：通訳入門

通訳入門は、CALL システムのサイマル機能をフルに利用し、シャドーイングの手法を用い同時通訳者を養成する為の音声訓練を行っている（写真）。通訳の技能レベルは、国際



会議に要請される専門知識が必要なレベルから、サッカー選手のアテンドをするボランティア通訳のレベルまで様々である。この授業では、短期留学後、英語力を向上させたい学生を対象に、音声のみを聞き、2カ国語を切り替えることを可能とする訓練をし、模擬通訳を実践する。教材は、アルク社の英語道場の英文サイトとネットアカデミーのリスニングサイトを使用しているが、適宜学生にテーマを与え、資料を読む、まとめる、スピーチにする、相手のスピーチのノートをとる、要約するという作業を経て、日本語または英語への通訳という形に仕上げる。最終課題は、学生たちの共同作業により同時通訳を挿入したニュースの発表を行うことである。

4. 専門ゼミナール

4.1 ニューヨーク国連研修・教育ボランティア活動

専門ゼミでは、学生の将来の進路を考えるきっかけとするために、英語を使用する世界の現場を実際に体験することを、教育活動のひとつと位置づけている。特に、国際協力、国際ビジネス、国際教育の現場を、若い時代に自分の目で見て、関心を持ち、進路を開拓する知力と実行力を身につけてほしいとの願いから、希望者に対して、ニューヨーク（春）と途上国（夏）での研修を実施している。

ニューヨークでの研修は、この冬で3回目

を迎える。本学卒業生の日野紀子氏が代表をつとめる NY de Volunteer という NPO を介し、教育ボランティア活動に参加し、ニューヨーク多民族社会を自分で観察する。昨年はホームレスが社会復帰するための施設、心身に障害を持った子供たちを支援する施設の2カ所で活動した。学校現場、エイズ患者の施設、9.11 犠牲者家族との対話、NY 社会で働く日本人コミュニティ、金融ビジネスの現場など、今後学生たちが関心を払う活動の場所を日野氏の支援で開拓している。しかしニューヨークの活動の中心は、世界の動きを映す国連本部での研修である。日本人国連職員から国連の働き、職員の仕事についてブリーフィングを受け、本部を見学する。写真は国連「安全保障理事会」会議場にて研修を受ける学生たち。



コロンビア大学では、日本語教育の現場を知るために日本語科の授業を訪問し、事前に連絡を受けたテーマでディカッションを行った。昨年のテーマは「日本の宗教と習慣」。日常疑問に思わない日本の習慣について、学生たちもしっかり準備をして臨んだ（写真）。



4.2 国際ボランティア活動

国際学部では、学生たちが世界の紛争地の復興現場に立って、国際協力を直接見聞すると共に、孤児や帰還難民の生活支援などを行っている。2003年以降学生が訪問した地域は、コソボ、東ティモール、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、ウガンダ、フィリピン、ボリビアに及ぶ。ゼミではこの活動への参加を奨励している。「紛争後地域における言語の役割」が私の研究テーマであるため、調査を兼ねて学生たちを毎年同行する。民族対立による紛争地だった地域を訪問する場合、人間の安全保障、民族浄化とは何か、個人と国際協力の関わりなどを課題とし、学生自身による現地調査を行うが、学生たちは子供たちとの交流、ボランティアとしての時間を最も大切にしている。国際機関の人たちからのブリーフィングは常に英語、現地語との通訳も英語で行われるため、現地では英語を日常的に使用し、結果としてコミュニケーション能力が磨かれる。写真は、ボスニア・ヘルツェゴビナの児童施設で書道を教える学生たち。詳しくは、「生田祐子授業HP：国際ボランティア活動」をご参照下さい。



4.3 英語ディベートと英語強化指導

学生たちは、将来国際的な現場で働くことを望む者が多いため、3年次から英字新聞から英文の小説まで幅広い英語の読書を続け、学生自身で英語の基礎体力増進に励む。大学レベルとして高度な英文購読、レポート、プレゼン能力を養い、より高度な対話能力を身につけるため、今年度より英語ディベートを取り入れ、湘南キャンパスで開催した第1回英語ディベート大会に参加した。ディベートは、個人の英語コミュニケーション力を競う

のでなく、スポーツのようにチームワークで力を発揮する。夏合宿（写真）にてチームで念入りに準備した学生たちは、すばらしい立論のプレゼンテーションを行い、大会ではベストスピーカーの賞を得た学生もいる。質疑、応答に機敏に対応できるディベート力が要求されるため、この準備プロセスを経て、ゼミ学生たちの結束力と対話力は一段と増したと実感する。



5. 最後に

大学教師として、ひとりの学生を動機付け、興味を抱いたテーマを掘り下げて、卒論に持っていくまでは長い道のりである。その過程において、学生が責任ある行動をとる瞬間、即ち「これは私の責任です。」と毅然と対応できる姿勢、問いかけられたことに対して、背を向けずに応じようとする努力を見る時には、改めて教師として幸せな気持ちになる。**Response**（応答する）+ **ability**（能力）= **Responsibility**（責任感）。しかし **Responsibility** は **Personality**（人格）なしには存在しない。少しでも文教大学での教育を通じて **Personality** の形成に貢献し、責任ある学生を社会へ送り出すことができればと願っている。



2008 年度ゼミ生たち